文化でつながる。未来とつながる。
THE FUTURE IS ART

Tokyo Tokyo FESTIVAL

パビリオン
トウキョウ
2021

2021年5月26日
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
パビリオン・トウキョウ2021実行委員会

Tokyo Tokyo FESTIVALスペシャル13
パビリオン・トウキョウ2021

パビリオン会場詳細発表（追加6ヶ所）

国際連合大学前 ／ 旧こどもの城前 ／ 代々木公園 パノラマ広場付近 ／
kudan house 庭園 ／ 浜離宮恩賜庭園 延遼館跡 ／ 高輪ゲートウェイ駅 改札内

真鍋大度 + Rhizomatiks 特別参加決定

最新映像作品“2020-2021”発表

関連イベント「パビリオン・トウキョウ2021展 at ワタリウム美術館」開催決定

会期：2021（令和3）年7月1日（木）～9月5日（日）

鑑賞時間：10:00～18:00
（浜離宮恩賜庭園：9:00～17:00、高輪ゲートウェイ駅：初電から終電まで）
＊鑑賞時間は変更になる可能性があります。公式サイトにてご確認ください。
＊一部パビリオンの鑑賞には入場料等が必要です。

会場：新国立競技場周辺エリアを中心に東京都内9か所
ビクタースタジオ前 ／ 国際連合大学前 ／旧こどもの城前 ／
代々木公園 パノラマ広場付近 ／ kudan house 庭園 ／
浜離宮恩賜庭園 延遼館跡 ／高輪ゲートウェイ駅 改札内 ／
ほか2か所

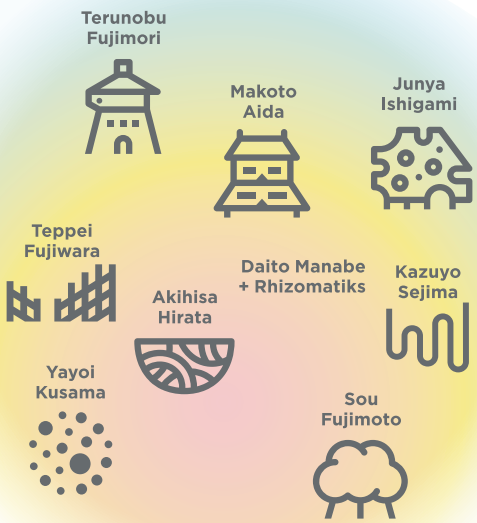
パビリオン・クリエイター：
藤森照信／妹島和世／藤本壮介／平田晃久／石上純也／
藤原徹平／会田誠／草間彌生

特別参加：真鍋大度 + Rhizomatiks

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
／パビリオン・トウキョウ2021実行委員会

企画：ワタリウム美術館

公式サイト：https://paviliontokyo.jp/



東京都

ARTS COUNCIL TOKYO

企画：
WATARI-UM
The Watari Museum of Contemporary Art

●「パビリオン・トウキョウ2021」とは

「パビリオン・トウキョウ2021」とは、「Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13」のひとつとして、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京、パビリオン・トウキョウ2021実行委員会によって開催されるイベントです。「パビリオン・トウキョウ2021」は新国立競技場を中心とする複数の場所に、建物やオブジェを設置し、自由で新しい都市のランドスケープを提案する世界初の試みです。観客は、地図を片手に宝探しのように、あるいは散歩のかたわらに、世界で活躍する建築家やアーティストたちがそれぞれの未来への願いを表したパビリオンを巡ることができます。

「生きている東京」を　――　いつの頃からか、東京では再開発という大きなエリア改造が多数進行している。どこも、便利でクリーンで見違えるように変身し、私たちはそこでたくさんの恩恵をうけ、豊かな生活を満喫している。一方、区立青山小学校出身の私には、かつて青山通りを偉そうに走っていた都電、その車庫のあった旧「こどもの城」辺りの空虚なほど広い空、渋谷駅では戦後の悲しみに遭遇し怖かった記憶が残っている。街にはそんな心に残るシーンが必ず仕込まれていた。実は今回の「パビリオン・トウキョウ2021」という企画は、そんな都市の物語を新たに作ることを目指している。コロナ禍により世界が大きく変化しようとしている2021年、夏。その年に、存在し得ない不思議なパビリオンが東京の街に出没したという事、それが多くの人の心の中に少しだけでも届いたなら、この企画は大成功です。開催中の67日間、そんな「生きている東京」を実感してください。

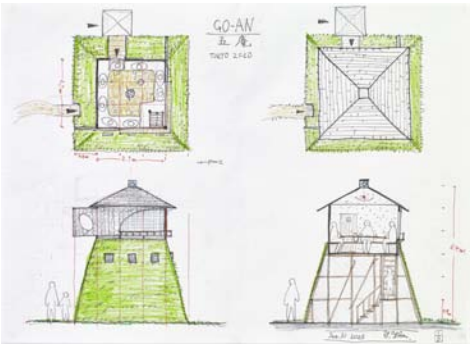
パビリオン・トウキョウ2021実行委員長　和多利恵津子

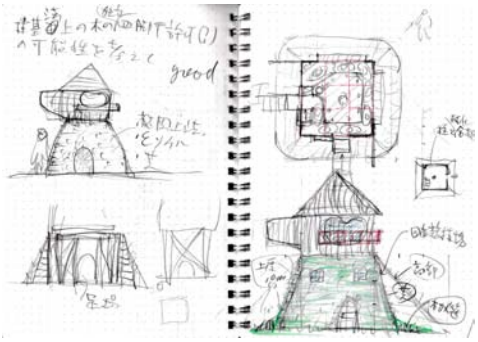
● パビリオン会場

藤森照信 / Terunobu Fujimori　茶室「五庵」 / Tea House “Go-an”

会場：ビクタースタジオ前　東京都渋谷区神宮前2-21-1

2021年7月、新国立競技場の目の前に現れる不思議なお茶室を、どうぞお楽しみに。





茶室「五庵」設計：藤森照信〈本プロジェクト案〉

撮影 播本和宜

撮影 木奥恵三

制作中の藤森照信

＊内部入場には事前予約が必要です。詳細は後日発表

妹島和世 / Kazuyo Sejima　水明 / Suimei

会場：浜離宮恩賜庭園 延遼館跡　東京都中央区浜離宮庭園 浜離宮恩賜庭園〈大手門口〉より　追加発表

水面に空を映しながら、庭の中をさらさら流れる曲水のようなパビリオンです。

水明　設計：妹島和世〈本プロジェクト案〉

＊見学には、浜離宮恩賜庭園への入園料が必要です。入園方法の詳細は、浜離宮恩賜庭園公式サイトをご覧ください。
https://www.tokyo-park.or.jp/park/format/index028.html

藤本壮介 / Sou Fujimoto　Cloud pavilion（雲のパビリオン）/ Cloud pavilion

第一会場：代々木公園 パノラマ広場付近　東京都渋谷区代々木神園町、神南二丁目　代々木公園〈原宿門〉より　追加発表

第二会場：高輪ゲートウェイ駅 改札内　東京都港区港南2-1-220　追加発表

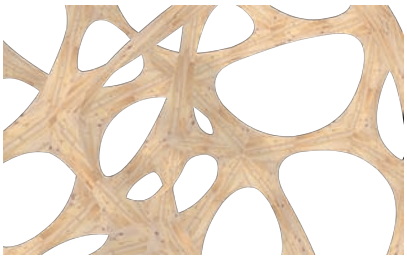
東京の各地に現れる、ふわふわと浮かぶ雲のパビリオンです。

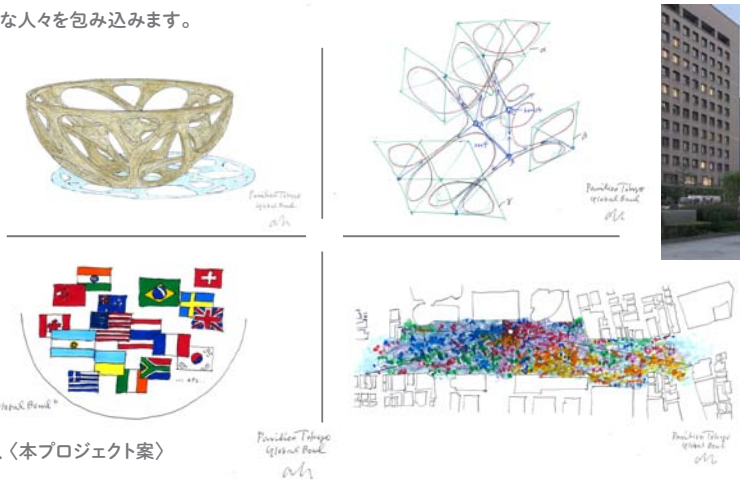
Cloud pavilion（雲のパビリオン）　設計：藤本壮介〈本プロジェクト案〉

平田晃久 / Akihisa Hirata　Global Bowl / Global Bowl

会場：国際連合大学前　東京都渋谷区神宮前5-53-70　追加発表

大きなお椀が、街を行き交う様々な人々を包み込みます。





Global Bowl　設計：平田晃久〈本プロジェクト案〉

石上純也 / Junya Ishigami　木陰雲 / Kokage-gumo

会場：kudan house 庭園　東京都千代田区九段北1-15-9　追加発表

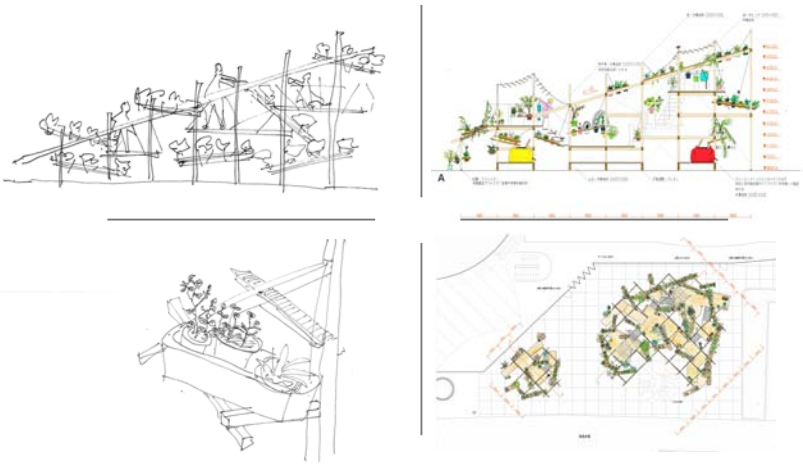
焼杉を用いて、新しくも、古くからそこにあるような、不思議な風景を作り出します。

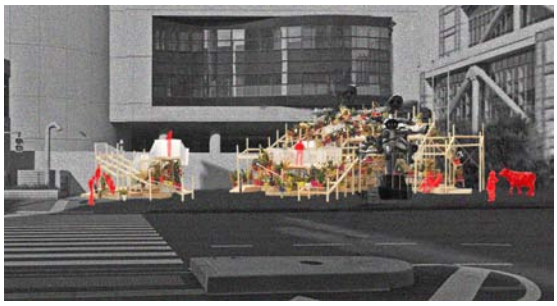
木陰雲　設計：石上純也〈本プロジェクト案〉

藤原徹平 / Teppei Fujiwara　ストリート ガーデン シアター / STREET GARDEN THEATER

会場：旧こどもの城前　東京都渋谷区神宮前5-53-1　追加発表

人と植物が有機的に織りなす、路地の庭のようなパビリオンです。



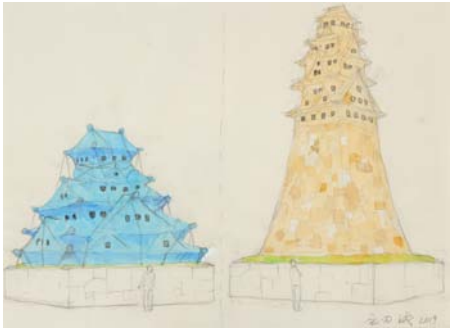


ストリート ガーデン シアター　設計：藤原徹平〈本プロジェクト案〉

会田誠 / Makoto Aida　東京城 / Tokyo Castle

会場は後日発表

段ボールとブルーシートでできた2つのお城が登場します。



東京城　作：会田誠〈本プロジェクト案〉
撮影：宮島径　© AIDA Makoto　Courtesy of Mizuma Art Gallery

制作中の会田誠
Courtesy of Mizuma Art Gallery

草間彌生 / Yayoi Kusama　オブリタレーションルーム / The Obliteration Room

会場は後日発表

真っ白な部屋に来場者がカラフルなシールを貼っていきます。

オブリタレーションルーム　作：草間彌生〈本プロジェクト案〉
©YAYOI KUSAMA　Yayoi Kusama / The obliteration room 2002–present
Collaboration between Yayoi Kusama and Queensland Art Gallery.
Commissioned Queensland Art Gallery. Gift of the artist through the Queensland Art Gallery Foundation 2012
Collection: Queensland Art Gallery, Australia　Photograph: QAGOMA Photography
協力：オオタファインアーツ

【特別参加】

真鍋大度 + Rhizomatiks / Daito Manabe + Rhizomatiks 追加発表

“2020-2021” / “2020-2021”

会場：ワタリウム美術館 向かい側の空地 東京都渋谷区神宮前3-41-5

使われなかったデータや中止になったイベントなどの特徴をAIで抽象化し光として表示します。
人々が目にするのは壁に反射するそれらの幻影です。

Installation view, Sensing Streams 2021 - invisible, inaudible, 2021,
Ryuichi Sakamoto + Daito Manabe, ‘seeing sound, hearing time’,
courtesy M WOODS HUTONG, Beijing, 2021.
Photo by M WOODS photography team

ライゾマティクス: 技術と表現の新しい可能性を探求し、研究開発要素の強い実験的なプロジェクトを中心に、ハード・ソフトの開発から、オペレーションまで、プロジェクトにおける全ての工程に責任を持ち、人とテクノロジーの関係について研究しながらR&Dプロジェクトや作品制作を行う。また、外部のアーティストや研究者・科学者などとのコラボレーションワークを通じ、カッティングエッジな表現作品、研究を世の中に発表している。

関連プロジェクト

【飲料水を無料配布予定】

会期中、一部会場／限定数にて、飲料水の無料配布を予定しています（オリジナル・ラッピング付き）。
（株式会社カクイチ協力）
*配布場所は、後日、公式サイトにてお知らせします。

【パビリオン・スタッフ】

会期中、会場では、観客をお迎えし、作品の魅力を伝えるスタッフがみなさんをお待ちしております。

パビリオン・スタッフ
オリジナルTシャツ

*内容は変更になる可能性があります。
*専用の駐車場はございません。近隣の駐車場は限られておりますので、お車でのご来場は控えていただきますようお願いいたします。
*荒天候時の対応については、公式サイトにてご確認ください。
*本展示は新型コロナウイルスの感染防止対策を徹底して実施します。また、ご来場のお客様へも感染症対策へのご理解・ご協力を賜りたく、公式サイトに記載の内容をご一読いただき、遵守くださいますようお願い申し上げます。

アクセス・ご鑑賞にあたっての詳細は、公式サイトにてご確認ください。
https://paviliontokyo.jp/

関連イベント

「パビリオン・トウキョウ2021展 at ワタリウム美術館」

会期：2021（令和3）年6月19日（土）— 9月5日（日）

本展は「パビリオン・トウキョウ2021」をより深く知り、楽しんでもらい、多くの方に足を運んでもらうことを目指して開催します。
展示室では、クリエイター7名によるパビリオン制作時のプロセス、スケッチや図面、模型、実際に使用された素材などを展示します。またそれぞれのパビリオンのコンセプトについて自身が語る映像のほか、7名のクリエイターのこれまでの活動や作品を伝える〈特別年表〉やドキュメントや映像も展示します（映像制作：柿本ケンサク）。

休館日：月曜日（8/9は開館）
開館時間：11:00-19:00
入館料：1000円
高校生以下無料／身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳お持ちの方は無料
＊入場方法／入場制限については、「パビリオン・トウキョウ2021」公式サイト（ https://paviliontokyo.jp/）にてご確認ください。
参加クリエイター：藤森照信／妹島和世／藤本壮介／平田晃久／石上純也／藤原徹平／会田誠
会場：ワタリウム美術館　〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6　http://www.watarium.co.jp
展覧会についてのお問合せ：TEL: 03-3402-3001（ワタリウム美術館）
公式サイト: https://paviliontokyo.jp/

藤森照信　茶室「五庵」のためのドローイング

パビリオン・クリエイターより「パビリオン・トウキョウ2021」へのコメント

東京オリンピックに合わせて茶室を作ろう。茶室は世界にも類を見ないビルディングタイプとして多くの人に見てもらいたい。
400年前に定形化した伝統的茶室もいいが、フリースタイルの茶室のほうが建築的面白さは大きい。
フリースタイルの茶室をこれまで日本と世界でいくつも手がけてきたが、せっかくだから何か一つ新しいことをしよう。そう考えて思い到ったのは、地面が小さくポコッと隆起した上に載るテーブル式の茶室。
地上に穿(うが)たれた小さな入口から潜(もぐ)り入り、暗い中を潜(くぐ)って茶室に上がると、視界が開け、オリンピックの巨体な競技場と東京の街の一画が見える。
夜になって明かりが灯(とも)ると、茶室というより大きな灯籠(とうろう)のような働きをするだろう。
茶室本体はJパネルで作り、外側は焼杉を貼っている。炭という物質は土と並んで究極の建築材料にほかならない。なぜなら、すべての有機物は炭に帰るし、すべての無機物は風化の果てに土に至るからだ。
室内の壁にはJパネルが露出するが、天井にはJパネルの上に漆喰を塗り、その上に砕いた炭の小片を貼って仕上げる。外にも炭、中にも炭。
この茶室は立礼(りゅうれい テーブル式)だから、テーブルが大きな見せ場となる。信州の山から伐り出した栗の厚板を何枚も継ぎ、節や割れや歪みを積極的に生かして自然の木の持つ野性味を表立たせる。そしてテーブルに穴をあけて炉を入れ、水盤を埋めて花を活ける。火と水は、400年前に利休が茶室というビルディングタイプを創った時からの良きコンビ。
建築には珍しく茶室は人間のように自分の名を持つ。
“五庵” ―― **藤森照信**

浜離宮は水とともにある庭園と言えると思います。その風景に現代を表すような水を足してみたいと考えました。曲水は、遠くから見ると留まっているように見えます。でも、近づいて見ると静かに流れていることに気づきます。このゆっくりとした水は、過去、現在、未来のつながりを表しています。
―― **妹島和世**

外観があるが壁はなく、しかし内部空間は存在する。しかもその空間は三次元的に非常に複雑でダイナミック。建築では絶対に実現できない、しかし建築的な何かがあるように感じさせる存在が雲なのです。 ―― **藤本壮介**

たとえば樹上を自由に行きかう動物たちのように、人間が動物的本性を解放して行動できるような建築をつくること。それが僕の建築のテーマです。〈からまりしろ〉(「からまる」余地=「しろ」)というのがその時のキーワードです。人々の動物としての感覚を呼び覚ます、3次元的なからまりしろは、どこかツルツルピカピカした状態になっていきがちな現代都市の中に、手触りのある異質性、あるいは「ひだ」をつくりだすでしょう。

未来の都市は、動物としての人間に開かれたものであってほしい、そう思っています。世界の人々に開かれて企画されたパビリオン・トウキョウでは、国籍や文化、人種や性別の差を超えて、種としての人間が動物としての喜びを共有できる場所をつくりたいと思いました。オリンピックスタジアムと比べてはるかに小さくとも、ボウル(お椀)のような形をつくることで、かえって坩堝のような強度を持った「動物たち」の〈からまりしろ〉ができるのではないかと。

人々が互いの身体を介して、喜びを分かち合う機会がうしなわれている2021年のこの状況は、皮肉という他ありません。しかし、だからこそ、そんなシーンを「待ち続ける」このパビリオンは、意味を持ったモニュメントとなるのかもしれません。生身の身体を介して人々が集まる場の楽しさや重要性を決して忘れない、という決意のあらわれとして。また、コロナに打ち克つだけでなく、地球規模で起こっている根本的な矛盾に向き合う意志のあらわれとして。

孔だらけのボウルは、内外の境界をほどきつつ結ぶ、反転する幾何学でできています。つまり、都市の中に小さな閉域をつくりながら、同時に外側とつながるのです。国連大学前の敷地は、隣接する公開空地と湾曲する青山通りがつくり出す、都市の巨大なボイドが感じられる場所です。このパビリオンは観測装置のように、このボイドのへそのような位置に置かれます。

木材を3次元カットして組み合わせる、日本の最新技術を生かした建築が、力強い物質感と工芸品のような緊張感を持って立ち上がり、都市の中に様々な文脈を引き寄せる、孔のような場所が生まれるでしょう。 ―― **平田晃久**

九段下に昭和2年、実業家の山口萬吉によって建てられた古い邸宅がある。設計には東京タワーの構造計画をおこなった内藤多仲も関わっている。この邸宅の美しく古い庭に2021の夏期限定で、日差しを柔らかく遮る日除けを計画する。
新しく計画される日除けが、歴史ある風景に溶け込むように、新築であるにも関わらず、はじめから古さを含み持つようにと考えた。具体的には、木造の柱と屋根を庭いっぱいに計画し、その構造体を焼き杉の技術を用いて焼いていく。様々に火力を調整しながら、杉の表面を炭化させ、場所によっては構造体そのものを焼き切る。庭に広がる木の構造体が、既存の庭に生い茂る老木を避けるように、焼かれながらしなやかに形状が整えられていく。炎で炭化した真っ黒の構造体は、廃墟のような趣もある。新築から廃墟の状態に、瞬時に駆け抜け変化したようでもあり、建築が経年によって得られる移り変わりを一気に獲得したかのようだ。
昭和初期の時代にはまだ存在していなかった周りの高層建築を黒い構造体が覆い隠し、構造体に開けられた無数の穴からの無数の光の粒が、樹木からの木漏れ日と混ざり合う。樹木の間から覗く現代の風景は消え去り、夏の強い日差しは和らぎ、訪れる人々はこの庭のなかに流れる古い時間とともに過ごす。真っ黒の構造体は、夏の午後に老木の間を漂う涼し気な影である。 ―― **石上純也**

この1年間で考えたこと

ちょうど1年ほど前、コロナ禍は納まらず、オリンピックの1年延期が決定。パビリオン・トウキョウも2021年に延期されることになった。

単に1年ずれただけでなく、私には世界のバランスがもっと全体的に崩れているようにも感じられた。(例えば、もしもオリンピック自体が中止になったとしても、それが大きい出来事とは多くの人は感じないだろう。)

こうした世界の変化を受けて、私はパビリオンのコンセプトを変えることにした。

ストリートに着目するという着想そのものは変わっていないが、そこに植物の視点、人間以外の存在を加えて考えた。

人間が苦しんできたこの1年、植物はまるで影響を受けていないように見える。人間の活動が弱まったせいか、ずっと家にいるせいか、私は植物に目を向ける機会が以前よりずっと増えてきている。

東京という都市の歴史を植物にこだわって調べていくと、庭が重要な存在であるということがクリアになってきた。江戸時代、大名たちが何百もの屋敷を構え、その屋敷には必ず庭園がつくられた。そのごく一部が、新宿御苑、有栖川公園などの重要な都市公園として残るが、そうした庭園が何千もひしめき合っていたのだから、江戸はまさに「庭の都」「植物の都」だった。

将軍や大名たちだけが、植物を愛でていたかというと、そうではないのが面白いところで、長屋住まいの庶民たちも自分たちだけの庭を育んでいた。

それを可能にしたのが、大名たちの庭を手入れする大量の植木職人たちの出現と、格安の植木鉢の登場、そして江戸の行商文化である。

今も東京では路地裏に入り込むと植木鉢が道や建物を埋め尽くすような風景に出くわすことがある。これは東京という都市が、階級差を越えて庭園を愛でる都市になっていったその歴史の痕跡である。植木は、東京という都市の最小スケールの秩序と言ってもよいかもしれない。

このパビリオンを通じて、東京の植物と道にまつわる物語を提示しようと思う。

東京という都市に脈々と流れる、植物と人間がつくってきた循環的な関係。ローム層の肥沃な土が可能にした、都市の路地裏で農を営む都市。

このストリートパビリオンは、自分たちの日常をたくましく耕し続けてきた東京の市民文化に捧げられた、ひと夏の都市計画として提示される。

この都市の文化の根っこが肥大化し、瘤のように隆起した異質空間、位相がずれてしまった世界のバランスを元に戻すのではなく、別の秩序に移行するきっかけになれば面白いと考えている。

2021年2月23日 二度目の緊急事態宣言下の東京 ―――― 藤原徹平

『東京城』

僕が新潟から上京した1984年はバブル期の真っただ中だった。

僕は繁栄のさなかにも、その正反対のものを幻視するような根暗な青年だった。

「新宿城」を作ったのは、まだ好景気の余韻が残る1995年。

当時新宿駅西口にはホームレスたちのダンボールハウスが溢れていて、それを青島都知事が排除しようとしていた。

オリンピックが来るはずだった今年、若手建築家に混じって「パビリオン・トウキョウ」という屋外展に呼ばれた時、僕は25年前の「新宿城」を違う形で復活させようと思った。

ダンボールとブルーシート。

この25年間に起きた、大震災や自然災害やオウム事件や原発事故や日本経済衰退に思いを馳せながら。

今は世界的にコロナ禍。

そして東京にいつかはまた来るだろう、決定的なカタストロフィ。

しかし仕方ない。

ポジティブ⇄ネガティブの往還にしか「力」は生まれないのだから。

「東京城」は逆説的かもしれないが、「健全でしなやかな力強さの象徴」として企画する。 2020年9月2日

以上は「生きている東京」展(ワタリウム美術館、2020年9月5日〜2021年1月31日)で『東京城』のマケット等を展示した際に壁に掲示したテキストである。以下もう少し補足しよう。

僕は恒久的なモニュメントや野外彫刻やパブリックアートにずっと懐疑的だった。石やブロンズや鉄といった、古くからある固くて重いものであれ、FRPやステンレスを用いるジェフ・クーンズやダミアン・ハーストなどの現代美術系のものであれ。しかし今回、矛盾した気持ちを抱えつつ、このイベントに参加することにした。強調したいのは恒久性とは真逆の仮設性、頼りなさ、ヘナチョコさ――しかしそれに頑張って耐えている健気な姿である。どうなるか、やってみなければわからない。一か八か作ってみる。それを現在の日本――東京に捧げたい。 ―――― 会田誠

たとえば、身体じゅうに水玉をつける。それから、バックもすべて水玉模様にしてしまう。それがセルフ・オブリタレーション(自己消滅)。あるいは、馬に水玉をいっぱいつけて、バックも水玉にすると、馬のフォルムが消えて水玉と同化してしまう。馬の塊が永遠なものに同化していく。そうすると、私自身もオブリタレイトする。

(草間彌生『無限の網-草間彌生自伝』)、2002年 より ―――― 草間彌生

パビリオンクリエイター

藤森照信

1946年生。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。現在、江戸東京博物館館長、東京大学名誉教授、工学院大学特任教授。近代建築史・都市史研究を経て1991年、45歳のときに〈神長官守矢史料館〉で建築家としてデビュー。土地固有の自然素材を多用し、自然と人工物が一体となった姿の建物を多く手掛けている。建築の工事には、素人で構成される「縄文建築団」が参加することも。代表作に〈タンポポハウス〉、〈ニラハウス〉、〈高過庵〉など。近作に〈多治見市モザイクタイルミュージアム〉や「ラ コリーナ近江八幡」の〈草屋根〉、〈銅屋根〉などがある。

妹島和世

©Aiko Suzuki

1956年生。日本女子大学大学院家政学部住居学科修了。1987年妹島和世建築設計事務所設立。1995年西沢立衛と共にSANAAを設立。代表作に〈金沢21世紀美術館〉、ニューヨークの〈ニュー・ミュージアム〉、〈ルーヴル・ランス〉、〈すみだ北斎美術館〉(妹島事務所として)、最新作〈大阪芸術大学アートサイエンス学科棟〉(妹島事務所として)など。2010年、第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展にて、日本人、そして女性として初めて総合ディレクターを務める。プリツカー賞、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞、日本建築学会賞、紫綬褒章(個人として)、他受賞多数。※上記の建築作品、受賞は特記のない限りSANAA名義。

藤本壮介

1971年生。東京大学工学部建築学科卒業後、2000年に藤本壮介建築設計事務所を設立。主な作品に〈武蔵野美術大学美術館・図書館〉、ロンドンの〈サーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2013〉、フランス モンペリエの〈L'Arbre Blanc〉、最新作〈白井屋ホテル〉など。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞、2015年パリ・サクレー・エコール・ポリテクニーク・ラーニングセンター国際設計競技最優秀賞につぎ、2016年Reinventer.paris国際設計競技ポルトマイヨ・パーシング地区最優秀賞を受賞。2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)の会場デザインプロデューサーを務める。

平田晃久

©Luca Gabino

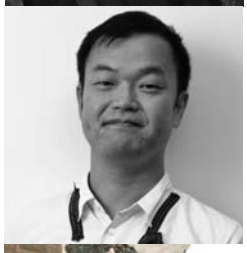
1971年生。京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所を経て、2005年に平田晃久建築設計事務所を設立。現在、京都大学教授。主な作品に〈Kotoriku〉、〈太田市美術館・図書館〉、〈ナインアワーズ〉など。2022年に完成予定の「神宮前六丁目地区第一市街地再開発事業」の外装・屋上デザインを手がける。第19回JIA新人賞、Elita Design Award、第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞(日本館)、日本建築設計 学会賞、村野藤吾賞など受賞多数。2016年にニューヨーク近代美術館の「Japanese Constellation」展に参加。

石上純也

©CHIKASHI SUZUKI

1974年生。東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了。妹島和世建築設計事務所を経て、2004年石上純也建築設計事務所を設立。東京理科大学非常勤講師、東北大学大学院特任准教授、2014年よりハーバード大学大学院客員教授を歴任。主な作品に〈神奈川工科大学KAIT工房〉、「アート・ビオトープ那須」の〈水庭〉、〈サーペンタイン・パビリオン2019〉など。日本建築学会賞、第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞など受賞多数。2018年、パリのカルティエ現代美術財団で大規模個展「石上純也 自由な建築」展を開催。

藤原徹平



1975年生。横浜国立大学大学院工学研究科修士課程修了。2001年より隈研吾建築都市設計事務所にて、〈ティファニー銀座〉、〈北京・三里屯SOHO〉、〈浅草文化観光センター〉、〈マルセイユ現代美術センター〉など世界20都市以上のプロジェクトを担当。2009年よりフジワラテッペイアーキテクツラボ代表。2010年よりNPO法人ドリフターズインターナショナル理事。2012年より横浜国立大学大学院Y-GSA准教授。アートや演劇、都市など他分野に越境した活動を行っている。主な作品に〈クルックフィールズ〉、〈那須塩原市まちなか交流センター くるる〉、〈稲村の森の家〉、〈リボーンアートフェスティバル2017会場デザイン〉など。

会田誠

Courtesy of Mizuma Art Gallery

1965年生。東京藝術大学大学院美術研究科修了(油画技法・材料研究室)。美少女、戦争、サラリーマンなど、社会や歴史、現代と近代以前、西洋と東洋の境界を自由に往来し、奇想天外な対比や痛烈な批評性を提示する作風で、幅広い世代から圧倒的な支持を得ている。平面作品に限らず、彫刻、パフォーマンス、映像、小説や漫画の執筆など活動は多岐にわたる。主な展覧会に「バイバイキティ!!! -天国と地獄の狭間で- 日本現代アートの今」(ニューヨーク、2011年)、「天才でごめんなさい」(森美術館、2012年)、「GROUND NO PLAN」(青山クリスタルビル、2018年)など。

草間彌生

©YAYOI KUSAMA

1929年生。幼少期から幻視・幻聴を体験し、水玉や網模様をモチーフに絵画を制作し始め、1957年単身渡米、単一モチーフの強迫的な反復と増殖による自己消滅という芸術哲学を見出し、ネット・ペインティング、ソフト・スカルプチャー、鏡や電飾を使った環境彫刻やハプニングなど多様な展開を見せ、前衛芸術家としての地位を確立。芸術活動の傍ら、小説、詩集も多数発表。代表作に「無限の網」「水玉強迫」「南瓜」「わが永遠の魂」などがある。現在も国内外で精力的に活動を続ける、最も重要な日本人アーティストの一人である。2016年文化勲章を受章。2017年には、国立新美術館で大回顧展を開催。同年、「草間彌生美術館」を東京・新宿にオープン。

【クリエイター・インタビュー進行中】

パビリオン・トウキョウ2021参加クリエイターが、自身のパビリオンと東京への思いについて語るインタビューがTOTO出版HPにて公開されています。
（https://jp.toto.com/publishing/pav_tokyo2020/index.htm）

【SNSでも情報発信中】

https://www.facebook.com/paviliontokyo
https://www.instagram.com/paviliontokyo/
https://twitter.com/paviliontokyo

〈お問い合わせ先〉

パビリオン・トウキョウ 2021実行委員会事務局　ワタリウム美術館内　（　担当：杉山　）
TEL: 03-3402-3001／FAX: 03-3405-7714　E-mail: info@paviliontokyo.jp
公式サイト：https://paviliontokyo.jp

パビリオン・トウキョウ2021実行委員会
名誉実行委員長：隈研吾（建築家）
実行委員長：和多利恵津子（ワタリウム美術館館長）
実行委員：長谷部健（渋谷区長）／吉住健一（新宿区長）／武井雅昭（港区長）／
進士五十八（福井県立大学学長、造園学者）／米倉誠一郎（経済学者）
制作委員長：和多利浩一（ワタリウム美術館CEO）
アートディレクター：伊藤弘（groovisions 代表）
運営：アースガーデン ／（有）en
クリエイター・インタビュー：TOTO出版
法律担当：水野祐（シティライツ法律事務所　代表）
監事：佐々木誠（山岸睦夫税理士事務所）

特別協賛：株式会社大林組 ／ 株式会社ジンズホールディングス
協賛：東邦レオ株式会社 ／ 株式会社エヌ・シー・エヌ ／ Cartier ／
エイベックス・ビジネス・ディベロップメント株式会社 ／ 株式会社FORM GIVING ／ ビクターエンタテインメント
カート協力・水提供：株式会社カクイチ
警備協力：後藤商店株式会社

Tokyo Tokyo FESTIVALとは

オリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組です。

Tokyo Tokyo FESTIVALスペシャル13とは

斬新で独創的な企画や、より多くの人々が参加できる企画を幅広く募り、Tokyo Tokyo FESTIVALの中核を彩る事業として、東京都及び公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が実施するものです。国内外から応募のあった2,436件から選定し13の企画を、「Tokyo Tokyo FESTIVALスペシャル13」と総称し、展開しています。
公式WEBサイト：https://ttf-koubo.jp